

第29話（17頁） オンドリ

たい肥*のそばでオンドリが2羽けんかをしました。1羽のほうが力がありました。もう1羽をやっつけて、たい肥のそばから追いはらってしまいました。

メンドリたちが、みんなそのオンドリのまわりに集まって、ちやほやちやほやしました。オンドリは自分の力と名声をよそにも知らせたくくなりました。オンドリは納屋のうえにとびあがり、羽をばたばた打ちならし、大きな声で、「さあさあ、みなさんごらんなさい。オンドリを打ちまかしたのは、このわたしです。これほどの力持ちはこの世にほかにありません。」

おしまいまで言わないうちに、ワシがとんできて、そのオンドリを打ちのめし、つめでつかんで、巢にもちさってしまったとか…

*たい肥…わらや草をつみかさねてくささせた肥料

「同じ話がイソップ物語にも出てくる。ちょっと気になって字数を調べたら、『アーズブカ』の方が多かった。驚きというか、意外だったよ。」

「そうだね。アーズブカには教訓がつかないから一般的に短いと思い込んでいた。」

「しかも、この話に即せば、敗れて残ったオンドリがどうしたか、という後日談も出てこないんだから。」

「『アーズブカ』290字に対し、『イソップ寓話集』（中務哲郎訳、岩波文庫）にある〈タナグラの雄鶏（おんどり）〉（214頁）で240字。WEB検索でトップにあった〈二羽のオンドリとワシ〉も、表現は違うのに、やっぱり240字だった。」

「どうしてなのか、少し丹念に見てみよう。まず、アーズブカは少ない事実をビビッドに、その光景が思い浮かぶように描いている。」

「簡潔で動きがある、というわけか。」

「それから、かぎかつこの話し言葉が目立つ。前から思っていたことだが、この話では、『さあさあ、みなさんごらんなさい。……』と納屋の上から得意そうに演説を始める。千両役者みたいだね。」

「子ども向け、を強く意識したこともあるだろうが、アーズブカはなにせ、分かりやすくて読みやすい。」

「『メンドリたちが、みんなその（けんかに勝った）オンドリのまわりに集まって、ちやほやしました』。この場面がとても印象的だ。ちやほやされて、調子に乗ってオンドリは自慢しようと納屋に上っちゃった。」

「女性におだてられて舞い上がる男性って、よくいるよね。」（笑い）

「もちろん、イソップには、こういう場面は書かれていない。イソップは教訓優先だから、

どうしても説明調になってしまうのかな。」

「他人より運が良い時でも自慢してはならない（岩波文庫）。破滅の露払いに傲慢がやってくる（WEB）。ここでのイソップの教訓だ。そうしたことを訴えようとしたら、情景や心理描写には目が向かないかも。」

「アーズブカでは、ワシがオンドリをつまみ上げて飛び去るところで終わっていて、余韻を残した書き方になっている。」

「この話とは関係ないが、アーズブカにはよく人の名前が出てくる。イソップには、ギリシャ神話の神などは登場しても、普通の人には名前なしが大半じゃないか。名前のあった方が、断然、子どもたちの心に入りやすい。」

「トルストイの文章力、表現力は、本当にすごい。アーズブカには、その神髓が十二分に出ている気がするよ。」

「ストーリーも、一つ一つの言葉も、場面も、練りに練って書き上げている。トルストイのすごさを改めて確認して、ここは終わりとしよう。」